

## 甲山湿原のきのこ調査の報告

漆崎文子・河上浩・北川万里・酒田眞規子・中村達郎・古玉厚・松原久・三上博栄  
(西宮市きのこクラブOB会)

### はじめに

甲山は標高 308.9mで西宮のシンボルとして市民に親しまれています。周囲にはまだまだ自然が残っていて動植物も豊富です。私達はきのこを通して甲山の自然についての理解を深めたいと考え、2007年6月から定点観察を続け、年間20回ほど山の周りを歩いてきのこを観察しています。これまでに500種以上を記録し、一部は樹脂包埋標本を作製しました。記録した写真やデータ、標本は私たちの活動の記録として、また多くの方に『きのこ』の魅力を知らせていただく機会として、毎年開催している『きのこ(写真)展』において展示、公開しています。

今回調査した甲山湿原は、甲山の北東斜面にひろがっていて、第1湿原から第4湿原まであり、西宮市の天然記念物に指定され保護されています。この地層は、大阪湾の海の底にあった大阪層群が50~60万年前の六甲変動のときに盛り上がったもので、水はけが悪く雨が流れ込んで湿原が形成されました。斜面の途中から地下水が湧き出る湧水湿地で、主としてヌマガヤが優先する中間湿原です。

私たちは甲山のきのこを調べるなかで、甲山湿原にはどのようなきのこが見られるか知りたく考えました。甲山湿原の植物については調査をされていますが、菌類については調査された記録が見当たりませんでした。

### 調査方法

調査は、西宮市の許可を得て最も面積が広い第1湿原と次に広い第4湿原について、2012年1月から2016年3月までの4年3ヶ月にわたって、甲山定点観察の日程に合わせて毎月1回計38回を市の職員の方の立ち会いのもとで行いました。湿原の中心部分には黄色いロープが張られ、ロープの内側には入れないので、周囲を観察しました。

1月に初めて湿原に入るとススキが背丈ほどに伸び、ロープで囲まれた中心にはヌマガヤが見られ、コケ類もすこしありました。冬のあいだに見られたきのこは、湿原の柵近くの切り株に発生しているカワラタケ、カイガラタケなどの硬質菌がほとんどでした。

4月になると湿原の外でコバノミツバツツジが咲き出し、ショウジョウバカマも一面に咲きます。腐朽のすすんだ木からウラボニガサ、クロハナビラニカワタケ、そしてコケの間から発生するケコガサタケ属の一種のきのこが見られました。

5月には、やはりコケの間からケコガサタケ属のミズゴケタケを観察しました。6月頃になると、湿原は緑に覆われノハナショウブ、カキラン、など湿原の植物が咲きます。

アラゲコベニチャワンタケ、ヒイロタケ、マンネンタケ、クジラタケ等のほか菌根菌のドクベニタケも見られました。



7月から10月にかけては、甲山できのこが最も見られる季節ですが、湿原でも多種のきのこが発生します。腐生菌のイッポンシメジ属、ビロードツエタケ、ツノマタタケ等や、タマゴテングタケモドキ、カバイロツルタケ、ベニイグチ、ブドウニガイグチ、ドクベニダマシ、チチタケ等のほか甲山と同じような菌根菌が見られました。

11月から3月は、きのこの種類が少なくなり、硬質菌がほとんどですが、冬枯れのコケの間から真黒で小さなチャワンタケの仲間のクロチャワンタケが見つかりました。

### 結果と考察

調査の結果、ハラタケ類は12科55種、うち切り株や落ち葉などを分解し栄養とする腐生性のきのこは25種で、樹木と共生する菌根性のきのこは30種ありました。

ヒダナシタケ類は9科24種、うち菌根～腐生性のきのこ6種を含みます。キクラゲ類は4科5種、子囊菌類は7科7種を観察しました。

腐生性のきのこは年間をとおして発生していました。

菌根性のきのこは、夏から秋にかけて多く見られ、甲山の定点観察と共通するきのこが出ていたのは意外でした。

湿原は本来貧栄養状態が理想ですが、湿原の周囲から進入している樹木の根との共生により、菌根菌が多く発生しているのではないかと考えられます。

また、菌根菌は第1湿原のほうによく見られたのは、第4湿原は周囲に高い木がないので樹木の根があまり届いていないのではないかと推察されました。

夏の暑い時期には、ブドウニガイグチ、キツネノハナガサ、マンネンタケ等南方系のきのこが見られ、冬の寒い時期には、フユノコガサ等北方系のきのこが見られました。

植物においても、過去の寒冷期に分布したと考えられる中部地方の高層湿原に特徴的なノハナショウブ、ウメバチソウ、ヌマガヤ等があり、分布の本拠地が遠くマレーシアなど熱帯地方にあって、その北限が日本に達しているシンジュガヤの仲間やカガシラ、イグクサ等もあり、北方系と南方系の植物が甲山湿原では混在しています。

その他、かつてはハッチョウトンボやヒメタイコウチなどの珍しい昆虫が生息していました。ヒメタイコウチは今も生息しています。

湿原などのコケ類から発生するとされるフウセンタケ科ケコガサタケ属のきのこ4種、ミズゴケタケ、フユノコガサ、ヒナコガサ、ケコガサタケ属の一種、を見ることができたのは、かろうじて湿原の生態系がのこっているといえます。

しかし、ササやワラビなども増えてきており、材上性のきのこや菌根菌が湿原内に見られるということは、湿原の富栄養化や樹木の進出を暗示しております。

湿原というのは、1万年以前の氷河時代の生物がそこに閉じこめられて生きている場所であり、西宮



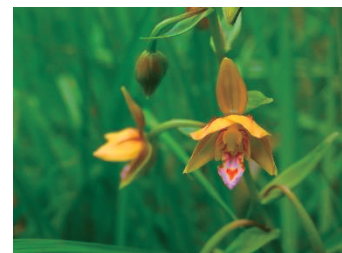
ケコガサタケ属の一種



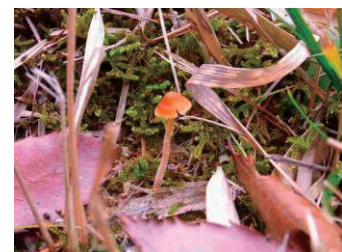
ミズゴケタケ



ノハナショウブ



カキラン



フユノコガサ

の湿原は、日本で最南端の貴重な湿原のひとつであるとも聞いております。

私たちは、湿原の植物や昆虫、小さなきのこたちが、これからも生きていける環境であることを願いながら貴重な甲山湿原を見守っていきたいと思います。

今回の調査について2016年11月6日、第8回『きのこ写真展』において、「甲山湿原のきのこ調査報告」～2012年1月から2016年3月までの記録～として報告しました。

湿原で見られた菌根性きのこの一部



カバイロツルタケ



ケショウハツ



ブドウニガイグチ

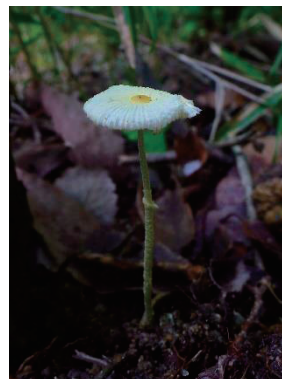
湿原で見られた腐生性きのこの一部



ツノマタタケ



カワラタケ



キツネノハナガサ